

久保田和男氏学位請求論文
『宋代開封の研究』 審査報告要旨

本論文は、中国五代、北宋の首都開封を研究対象とした、わが国最初の学位請求論文である。従来、開封の研究は、都市繁盛記の一種である『東京夢華録』、都市図会の一環である『清明上河図』という文献史料、絵画資料の二つを念頭に多く論じられてきた。しかし、それらはいずれも、南宋になって在りし日の賑わいを追憶する、南に追われた元東京開封府の住人の、いわば難民としての作品であり、そこに描かれた開封は、北宋末期の、限られた視点からの叙述、景観である。それら文献と絵画の二つの資料が、他の史料に比べ異常に詳細でリアルな叙述・描写を特長とすることから、従来の研究はそれらに圧倒され、ともすればそれら資料の特殊性を看過しがちであった。それに対し論者は、オーソドックスな文献史学の手法によって、五代から北宋末までの時間の経過のなかで、首都としての開封の機能や構造、景観の形成と変容を跡付け、東京夢華録と清明上河図の開封が出現するまでの歴史を再構成している。

論文は、序章とまとめとを除く全 8 章が三部に分けられ、各題目を示せば次のようである。
第一部 五代首都考 第一章 五代宋初の首都問題 第二章 五代洛陽の治安制度と都市景観
第二部 禁軍軍營の変遷と首都の都市空間 第三章 禁軍配備の変遷と首都の都市空間 第四章 都市人口数とその推移
第三部 都市空間の構造と首都市民の生活 第五章 治安制度と都市空間の構造 第六章 城内の東部と西部 第七章 宋代の時法と開封の朝 第八章 王安石と開封の都市社会

論者は、現在までの比較都市研究の方法論と成果を踏まえ、開封が一般都市と異なる首都であることを強調する。その上で、首都機能を権威と権力の二つに分け、それぞれ設定された課題の検討を行う。それらは長らく学界で論議されてきた問題もあれば、申請者が新たに提起した課題もあるが、いずれも従来の研究成果を批判的に継承し、自らの新見解を提出することに努める。当然ではあるが、まずその基本姿勢を評価したい。以下、著者の新見解にかかわる部分を中心に論評する。

第一章は、論者の研究視角が最も明確に看取できる箇所である。長安や洛陽ではなく、王都としてのさまざまな条件を満たしていない開封が、この時期、なぜ首都に選ばれたのかという疑問に、今までは大運河による漕運の便のためという答えが一般的であった。それに対し、五代・宋初に大運河は本来の機能を果たしていなかったことを実証し、まず従来の解答を否定する。次に五丈河と山東の歴史地理学的役割を検証し、開封の地政学的位置づけを行い、論者独自の見解を提示する。また宋の太祖まで、王都は洛陽であるという考えが牢固として存在し、事実、皇帝によっては首都機能の一部を洛陽に設け、開封は暫定的な仮の都に過ぎかったこともあったとする。首都機能における権威と権力の分離が出現したことがこの時期の特色であり、以後の開封の歴史はそれらが再統合する過程ともいえる。第二章は、分離した首都機能の権威の部分を担当する洛陽を、唐の首都と比較しながら検討し、開封に受け継がれる諸要素を抽出する。第三章で、著者は本論文の中心課題の一つである北宋禁軍の問題を提起し、その制度的推移を

跡付けた後、首都の空間論や景観論と禁軍との関わりを論ずる。その結果、宋の半ばまで開封は軍営都市の景観を呈したという注目すべき結論を導き、従来の開封のイメージの大幅な修正を行う。第四章は、その景観の変遷と密接に関連する、禁軍制度の推移による開封の人口構成の変遷を検討する。

第五章からは、開封居住者の生活までを視野に入れながら首都問題の諸側面を考察する。まず、唐以前と比較しつつ開封の都市空間を論じ、とくに坊牆制という都市区画制度を手掛かりに、その変遷と消滅の過程を追い、宋代首都開封の歴史的特色を描き出す。その中で、従来坊牆制の有無を論ずるときに必ずといってよいほど引用される史料が、実は開封ではなく洛陽の記事であることを指摘し、あるいは禁軍軍営こそ唐までの坊牆制を継承する役割を担ったとするなど斬新な見解が随処にみられる。また治安制度に関して、夜禁の形態の変化、街鼓に変わる伝呼による時の知らせなどの論証も有用である。第六章は、閉鎖空間の軍営と開放空間の市街地の布置を具体的に明らかにし、開封城内の対照的な景観を提示する。さらにその景観の大きな変化が、王安石の新法改革に連動した軍制改革後に出現することを実証し、開封が『清明上河図』の景観になるまでの過程を叙述する。第七章では、官僚の出勤時刻を手掛かりに、開封の時刻制度がどのようなものであったかが検討されている。これは、宋代史上、恐らく初めて提起された問題であり、昼間定時法と夜間不定時法の施行という結論は、宋代以降を含め、今後大いに論議されるべき課題であろう。第八章は、宋代開封の景観が激変する王安石時代に焦点を当て、とくにその市易法と開封社会の関連について考察している。

以上、本論文は、唐末五代から北宋末まで二百年間の開封の歴史を追い、この時代の中国王朝の首都を制度と実態の両側面から検討することで、その特質と変遷の諸相を明らかにすることに成功したといえる。これは、日本の中国史学が提起し、世界に高く評価されている唐宋変革論に、もう一つ、新たな具体的知見を加えることに繋がる。本請求論文は、申請者の既に発表されてきた論考を基礎にまとめられたという事情によるのか、叙述の重複箇所が散見され、あるいは第八章などさらに深く検討すべき課題も残されている。また本論文の結論を、アジア都市研究の全体の中にどのように位置づけるかに関しても考究する余地が残されているように思われる。今後、一書として公刊されるときには更なる検討を加えることを希望したい。しかし、本論文の中国史研究上にもつ意義は大きく、本審査委員会としては、博士（文学）の学位に十分値する研究であると評価する。

2003年3月28日

主任審査委員	早稲田大学教授	近藤一成
審査委員	早稲田大学教授	吉田順一
審査委員	早稲田大学助教授	柳澤 明